

シングルマザー物語としての『博士の愛した数式』 ——家政婦という装い

佐々木 亜紀子

はじめに

小川洋子の『博士の愛した数式』^①は二〇〇三年七月号『新潮』に発表され、翌月単行本化して、翌年第一回本屋大賞を受賞し、二〇〇六年に映画化された^②。八十分しか記憶のない数学者「博士」と、「家政婦」とその息子「ルート」との物語である。一般的な高評価の一方で、語りの偏向が批評や研究で指摘されている。

たとえば前田暎は、作中の「ノーヒット・ノーラン」にならなかつた試合を例に、試合の長さから考えても、八十分の記憶しかない博士の物語が逸脱していることを指摘し、「語り手の視線の偏在」を論じている^③。また山田夏樹は、「私、ルートとの関係性が「反復」のなかで蓄積、更新されているかのよう^④に語られ／騙られ」、「家族」の関係性を語って／騙っている方法を分析している。「離れ」が「擬似家族空間」を作り出していることの早い指摘は、初出翌月の清水良典「文芸時評」^⑤にもあるが、いずれも「家族」あるいは「擬似家族」ということにふれながら、家政婦の「私」が消去、排除しながら作り上げた物語の作爲的なありかたに切り込んでいる。ほかには関谷由美子が、「語りが排除しているのは、〈性愛による男女関係〉である」ことを指摘したうえで、「離れ」での「奇跡と祝祭の日々として」の語りや、「世俗社会における〈男

女の性的結合という親密性のパラダイムへの対抗概念)の「メッセージ性」を論じた。⁶⁾

しかし、ここで問題としたいのは、主人公の偏った語りと「家政婦」という職業との関連である。本論では、「家政婦」の語りという特徴を検討し、主人公「私」がシングルマザーとして息子を育ててきた側面に注目する。

一、「家政婦」というスタンス——〈鈍感な装い〉

先行研究が明らかにしたように、主人公の語りには確かにバイアスがある。だがいったいなぜそのような偏向した語りを展開したのか。それは主人公が「家事のプロとしての誇り」をもった「家政婦」であることに理由づけられる。

「家政婦」とは雇い主の忠実な僕であるべきだ。典型的な例としては夏目漱石『坊っちゃん』の清を挙げることができるだろう。「親譲りの無鉄砲」で、誰からも評価されない主人公を、清は決して貶さず「あなたは真っ直でよい御気性だ」と最大限の好意、「眞面目」によって理解しようとする。主人公の「私」の振る舞いは、この清に似ている。「家政婦」は雇い主の如何なる奇行も、愛情をもって理解し語るのだ。

小川洋子は「家政婦さんという職業」について、この小説の誕生に絡めて次のように述べている。

家政婦さんなら、ずかずかと無遠慮に人の人生に踏み込んではいけません。それでいて現実的な生活の面では大きな役割を果たす。相手がどんな人格を持っていても、とにかくすべてを受け入れ、耳を傾ける。⁸⁾

後半部にいう「とにかくすべてを受け入れ、耳を傾ける」よう「私」が振舞おうとしているのは、まず博士との最初の出会いからも顕著である。「君の靴のサイズはいくつかね」と尋ねられても、「私」はほかの家政婦のように、「あんな変人」

として切り捨てることはない。「どんな場合であれ、雇い主に對し質問に質問で答えてはならない」という家、政、婦、の、鉄、則、を、守り、「何故かは知らないが雇い主にとって靴のサイズが意味深いものであるなら、もう少しそれを話題に登らせておくべきではと考え」て、会話を続けている。

また、未亡人は初対面の場で、家政婦の「私」に、「端的に申せば、記憶が不自由なのです。惚けているわけではありません。全体として脳細胞は健全に働いている」と「義弟」のことを説明する。

だが、博士の人となりを考える際、未亡人の説明する「記憶が不自由」ということでは説明しきれないものがある。コミュニケーション不全を「言葉の代わりに数字」によつて武装するスタイルから始まり、生活能力の極端な低さ、服装や食事など生活全般への無関心、「一日中考えている」特異な集中力、固執した考えかたなどがあげられる。すでに解雇されたほかの家政婦たちが、博士の「数字攻撃に音を上げ」たのも頷ける。それでも未亡人は「記憶が不自由」な「ごく一部に故障が生じ」たに過ぎない状態だと「何の感情も込めずに淀みなく喋」る。そこで「私」は「家政婦」らしく、未亡人のわざとらしい淀みなさに気づきながらも、未亡人のことばどおりに「記憶が不自由」なだけの博士に合わせ、〈鈍感な装い〉で振舞っている。

博士と過ごす最後のパーティーでも、「私」はあくまで〈鈍感な装い〉を捨てない。そのパーティーは、「JOURNAL OF MATHEMATICS」から博士が「懸賞問題一等獲得」をしたことに対するお祝いが発端だった。「最高額の懸賞金」ではあったが、「答えがあると保証された問題」である。博士はもちろんその小ささを自覚し、数学世界での当然の謙虚さをもつて「祝いなど、必要ないと思われるがね」というが、「私」は大げさに「お祝いをしましょう」という。その後、「未亡人」の「あなたご自身も、お気づきになっていらしたでしょう？」ということばどおり、「八十分のテープは、壊れてしま」つており、「一緒に過ごす日が終わるのは間近であることを「私」は気づいていた。だからこそ、強引にパーティーを企画したのである。〈鈍感な装い〉で、気づかぬふりで、別れの宴を開いたのだ。

このように、忠誠心をもって雇い主の「すべてを受け入れ」、〈鈍感な装い〉で対応する「家政婦」としての語りというスタンスは、辻褃の合わない不自然さや偏向を覆い隠すという一面がある。

二、語りの特徴——擬似的師弟

主人公「私」の語りの特徴は、先にあげた「家政婦」としての忠誠や〈鈍感な装い〉ばかりではない。ゆつくりと真相へ近づいてゆく迂回する語りも特徴的だ。それはまさに博士のいう数学の真理への近づき方、「神の手帳にだけ記されている真理を、一行ずつ、書き写してゆくような」方法である。

ルートに「1」をはめ込んだ時も、友愛数を説明する時も、博士は決して解答をすぐには示さない。「計算してごらん。ゆつくりで、構わないから」と促す。冒頭から博士との日々を過去としてしていることから明らかのように、「私」はすでに解答を知っている。にもかかわらず、その語りはゆつくりと対象へ近づいてゆく。 $\sqrt{1}$ や、自然数の和の公式、オイラーの公式、アルティン予想、素数定理といった数式だけではなく、博士と「未亡人」との関係も、長い遠回りののちに奥ゆかしく語られている。「友愛数」は、山田論が指摘するように、一方的であるにもかかわらず、主人公と「博士」との「特別」な「関係性」として語られ（騙られ）ている。だが、ここでは、それがあたかも博士が的中させる予言であるかのように語られ、「雇い主の感知する力の大きさを裏付ける証拠とされていることに注目したい。

「私」の語りからは、この博士の並々ならぬ洞察力が示されていると一見読める。「靴のサイズ」4の階乗の「私」は、「実に潔く、博士との「友愛」に生き、ルートと命名された「息子」は、「どんな数字でも嫌がらず自分の中にかくまってやる、実に寛大な記号、ルート」のような青年に成長することは約束されているかのようである。「誰よりも早く、一番星を見つげられる」という「才能」で、「他の誰も区別できない、唯一無二の一点に意味を授ける」と同じように、「私」とルー

トの本質を「誰よりも早く」見抜いたかのようである。だが、事実は逆向きといえる。この家政婦は雇い主に言われた役割を生き、息子を雇い主に言い当てられた青年に育てたと事後的に語っているに過ぎないのだ。

「家政婦」といういささか古めかしい呼称¹⁰を「私」が選んでいることにも関わるが、元来「女中奉公」は「見習修行」という側面があつた。かつて女中を使用する家庭では、雇い主である「主婦は教師」であり「女中は生徒」だったという¹¹。主人公「私」は雇い主の博士から、数学のみならず生き方を懸命に学ぶ従順な「生徒」のようだ。「私と息子が博士から教わつた、数えきれない事柄」ともいう擬似的な師弟関係もまた「家政婦」的だ。ニックネームのような「博士」という呼び名は、匿名性を保証すると同時に、師と仰ぐにふさわしい名称である。

この忠実なる「家政婦」は、雇い主を師と仰いで学び、雇い主のことは生き、雇い主に倣つて遠回りしながら語っているのである。

三、「優れた女中」

以上のように、一見、「私」はまさに模範的「家政婦」であるかのようだ。だが先述した小川自身の「家政婦さんという職業」の前半部、すなわち「人の人生に踏み込んでほけません」というのは、少なくとも「私」には当てはまらないだろう。元来家政婦とは、「現実的な生活の面」での「大きな役割」によって、否応なく「人の人生に踏み込んで」いくことになるものである。

中島京子『小さいおうち』¹²には「女中奉公」ということばが有効だった時代の話が描かれている。そのなかに、語り手のタキという元女中が聞いた「ご主人様のために、お友達のお原稿を暖炉で焼いて差し上げた女中の話」がある。イギリスのある女中は「ご主人様の立身出世を願う心から、むしろ率先して、カタキにあたる友人のお原稿を焼き、自ら、その罪を

かぶった」という。そして話をした小説家小中先生から、「優れた女中は、主人が心の弱さから火にくべかねているものを、何も言われなくても自分の判断で火にくべて、そして叱られたら、わたくしが悪うございました、という女中」だとも聞く。換言すれば、忠誠心をもって「主人」の心底を読み取り、〈鈍感な装い〉で、「人生に踏み込んで」ゆく女中が、「優れた女中」なのである。タキは「市原悦子が出てくるテレビドラマなどを見て、家政婦や女中なんてものは、いつでも家人の手紙を勝手に読んでいると思うようだが、わたしたちはそんなことはしないのである」と言いつつも、結局は「優れた女中」として、心から慕う「時子奥様」の「人生に踏み込んで」しまう。

またその「市原悦子が出てくるテレビドラマ」『家政婦は見た！』の原作松本清張「熱い空気」¹³の河野信子は、もちろん「優れた女中」ではない。大学教授稲村の「書斎」で「家人の手紙」を探し、巧妙に家庭の平和を攪乱して「人の人生に踏み込む」ことを楽しみにする女中だ。

「私」はタキと同様に「何であれ雇い主のものをこっそり覗くのは、家政婦として最も恥ずべき行為だと承知」してはいる。だがもともと「主の歴史を語る微笑ましい小物、秘密めいた写真」に「興味をそそられる」ことはあった。そしてその「さやかな楽しみを味わう」ように、「ある日、書斎の本棚」から「クッキーの缶を見つけ」、「更に本棚の奥からは、埃だらけの大学ノートの本」を取り出す。そしてノートを「束ねた紐」をはずしたのか、「めくっても、めくっても」というほど読みふけり、ついに「14・00図書館前、N」という「殴り書き」を見つめる。「クッキーの缶」からは、のちにNへ捧げられた数学の論文とともに博士と未亡人との写真が発掘される。「私」が「それまでの遠慮が消え、大胆に」その秘密を発見する姿は、「優れた女中」に最も近い河野信子の「書斎」での振る舞いに重なる。しかしもちろん、信子と「私」とは決定的に違う。信子が悪意から秘密を探って暴露したのに対して、「私」は「優れた女中」として、カムフラージュして周到に語っているのだ。

四、謎としての「未亡人」

「私」の語りは、博士が亡くなった後のある時点で語られている。もちろんその時点で、「私」は博士と未亡人との関係が、単なる義弟と義姉ではないことを知っている。だが「私」は探偵小説のように、まず謎として語り、次第にその関係性を仄めかしてゆく。その語り口は、先述したように、博士が数学の真理へと近づく方法に倣っている。

未亡人と初対面の時のことを「私」はまず謎めかして語る。彼女が「落ち着きなく杖をいじり、「警戒心に満ちた目」をして「余計な詮索を差し挟む余裕を与えまいとする」態度であったという違和感である。そして「立派な母屋に比べ、離れは質素を通り越して見すばらしかった」と指摘し、「遺産を食い潰す厄介者のケアを、最低限不承不承しているという冷淡なポーズを、未亡人がとり続ける意図はまずは明かされない。そして「私がいけない間、未亡人が手助けしているのは間違いなかった（中略）ふに落ちなかった」と、いぶかしく語る。さらに、発熱した博士の看病で泊まった「私」を「覗き見」して「クレーム」をしてきた卑劣な女性として語り、ルートの訪問を「抗議」されたときも、「不可思議」で「奇妙」とし、「未亡人は私に嫉妬しているのかもしれない、という疑問が浮かぶこともあった」という。

しかし結局は和解放が訪れる。ルートと博士の前に、「私」と未亡人とが口論になったとき、博士は「 $e^{i\pi} + 1 = 0$ 」という数式でその場を収め、未亡人はその後、「私」の讖を撤回したのである。さらにそのとき未亡人は、数式が記された「メモ用紙」を「私」がとるのを「黙認」した。多くは語られない未亡人のことを、その数式を前に「数式の美しさを正しく理解している人の目」としているのは、未亡人が博士の真の理解者であることを仄めかしている。そしてその数式こそ、博士から未亡人への愛の捧げものだったことを明かす。未亡人がその「メモ用紙」を「私」に与えたのは、数式の秘密を「私」に与えたことを意味する。

「クッキーの缶」に隠されていたNへ捧げられた数学の論文の日付は、一九五七年。博士が二十九歳の時である。そして

博士の兄、すなわち未亡人の夫が亡くなったのは、博士が博士号を取得し、大学の数学研究所に就職した矢先である。その後、一九七五年に博士と未亡人が一緒に交通事故に遭うまで、「それぞれの穏やかな生活」があったという。それはどれくらいの期間なのだろう。十年以上経っていたのではないか。兄が亡くなって二人が結婚しなかったのは、その関係が兄の生きている頃から、すなわち一九五七年頃からであったために、却って罪の意識が重く二人にのしかかっていたからだろう。早世した亡夫への贖罪の日々の果てに不幸な交通事故に遭い、その運命を肅々と受けとめる道を未亡人は選んだのである。

外部からは推し量ることのできない二人の関係の歴史と、罪の前に跪く、節度ある生き方を、「家政婦」という立場、内部であり外部である立場で知り得た秘密として、「家政婦」の矜持をもって「私」は婉曲的に語っているのである。

「未亡人」という差別的ともいえる呼称を使い続けるのも、彼女自身が博士を「ギテイ」「義弟」と冷たく名指していることに由来する。彼女があくまで義理の姉弟という装いで過ごすことを選択している限り、それを尊重するのが「家政婦」らしい振る舞いなのである。

五、特別な家政婦

病状が重くなった博士が施設に入所することを告げたときは次のように語られる。

「私には分っております。義弟が唯一のお友だちと一緒に過ごせるのは、もうあの夜で最後になるだろうと。あなた自身も、お気づきになつていらしたでしょう？」

私は何も答えられず、ただ黙っていた。

「八十分のテープは、壊れてしまいました。(中略)」

「施設へお世話にうかがってもいいんです」

「その必要はありません。(中略)」

「私がおります。義弟は、あなたを覚えることは一生できません。けれど私のことは、一生忘れません」

未亡人から婉曲に拒絶され、博士に記憶されていないにも関わらず、「私とルートは一月か二月か三月に一度、博士に会いに行つた」という。あくまで鈍感さを押し通す「私」は、未亡人と博士との、長く秘められてきた恋情や関係の歴史を、知らないかのようにふるまうのである。

「ルートマイナス」の Imaginary number 「i」について、博士は「自分の胸を指差し」て「ここにあるよ」と言ったという。「我々の心の中にあつて、その小さな両手で世界を支えている」のは虚数「i」、すなわちアイ(=愛)である。直線と同じく、虚数は目に見えないが、博士の胸の中には存在すると比喩的に明かしている。

あるいは、「そんなにも美しいものたちが隠れていることなど誰にも知られないままに、しんとしていた」図書館の数学コーナーや、そこにある「誰の手によつて開かれることもなく生涯を終える数学書」として、二人の関係を暗示する。だがその「美しいもの」は確かにそこにあつた。秘められたものでありながら、誰かに見つげられることを望んでいる両義的な感情を、「私」は未亡人から「メモ」とともに受け取つたのだ。「クッキーの缶」のなかの数学の論文は、捧げられたNのものであるならば、そこへ写真とともに入れたのもN、すなわち未亡人であろう。「私」はそのような胸中を存分に汲み取り、実に注意深くふるまっていたのである。

「私」にとつて博士が特別な雇い主であつても、八十分の記憶しかない博士にとつて、記録されることのない「私」が特別な家政婦であるとは言い難い。だが、もう一人の、真の雇い主である未亡人にとつて、「私」は特別な家政婦だつた。クレー

マーの未亡人は、派遣された家政婦の九人を「私」のまえにすでに交替させていた。それは「余計な詮索を差し挟む」とを拒む「警戒心」からであろう。「余計な詮索」とは、もちろん義弟の博士との秘められた関係である。しかし数式の「メモ用紙」を「私」に取らせ、再雇用した。ほかの家政婦たちとは異なった対応である。それは未亡人に変化が訪れたためだ。「遺産を食い潰す」厄介者の義弟のケアを、「家政婦」に任せる冷淡なポーズをとり続けてきた未亡人が、「私」によってある決意に導かれている。その決意とは、「私がおります。義弟は、あなたを覚えることは一生できません。けれど私のことは、一生忘れません」という言葉に表れている。未亡人は「義弟」との関係を受け止める覚悟をしたのだ。

このように「私」のような「優れた女中」は、「現実的な生活の面」での「大きな役割」を担うなかで、否応なく「人の人生に踏み込んで」いくことになる。

六、「博士」という模像——暴くために造る

本作執筆前の小川洋子から質問を受けたという数学者藤原正彦は、「数学者といえは、なぜか「純粹」とか「奇人」が通り相場だ」と、世間のステレオタイプに不満を述べているが、まさに博士こそ「純粹」な「奇人」である。八十分だけの記憶という病症以上に、博士の「奇人」性が特徴的だ。

『博士の愛した数式』が構想されたのは、藤原によれば、『天才の栄光と挫折』もお読みになってインスピレーションが湧いた¹⁵⁾とのことである。この本で紹介されている数学者のなかで、特にアンドリュウ・ワイルズが、「インスピレーション」を与えたことは明らかである。

博士との最後のパーティから一年足らずで、「アンドリュウ・ワイルズによって、フェルマーの最終定理が証明された」という記事が載った¹⁶⁾とき、「私」は博士が書き付けたオイラーの公式のメモを取り出して博士を思い出す。「私」は世紀の

る舞いはまるでこの清のようだ。だがしかし、この語りに込められた意味は清ほど単純ではない。「私」はもつと策略家なのだ。「私」はステレオタイプの博士像を「製造して誇」ることで、「家政婦」らしい語りは装いに過ぎないことをむしろ明かしている。この物語に捏造と欠落、編集があることを隠そうとはしてない。そうすることで、「私」は「現実を物語化」していることをここで自ら暴露しているのだ。

この「現実を物語化」するとは、小川がアンネ・フランクを論じたなかの用語である。「アンネは（中略）日記を書くという行為を通して現実を物語化し、なんとか心の均衡を保ってきたのです」と、小川は述べている。⁽²²⁾

七、シングルマザーの成長物語

「彼のことを、私と息子は博士と呼んだ」と始められる「私」の語りには、既に失われた「博士と一緒に過ごした時間の密度」への郷愁と哀悼が滲んでいる。そしてその語りは「最後の訪問」の日で結ばれている。その日は、「ルートが二十二歳を迎えた秋」である。⁽²³⁾

「ルートは中学校の教員採用試験に合格したんです。来年の春から、数学の先生です」

私は誇らしく博士に報告する。

ルート自身の人生は本格的にはこれから始まる。もちろん四十歳の「私」の人生も続く。だが「私」のこの物語が、息子の就職を末尾に置くことで、シングルマザーの役割完結と語りの完結を重複させている点は留意すべきである。

「十八歳で、無知で、独りぼっち」で出産した「私」は、自身の心情を投影させるかのように、ルートを「間違った場所

に置き去りにされた不満を、誰かに訴えているかのようだ」と見ていた。「そもそもこの世に生まれた瞬間から、もう泣いていた」ルート。そのルートを産んだ日を、「貴重な一日」として祝ってくれた博士を、「友愛の契りを結んだ」人として、育児の伴走者として語る。この物語は、シングルマザーとしての「私」の成長物語であり、その物語の構築に、雇い主の功績というファクターを入れ込むことが目されているのだ。

語っている「私」自身は、手厚くケアされることの少ない子供だったろう。「物心ついた時、父親の姿は既になく、働く母に代わって「小さい頃から」「家事全般」をしていたという。母からは「ハンサムで立派な父の姿ばかり」聞かされたが、思春期になるころには、「母の語る幻想」に幻滅し、「私と母を放り出したまま」の「父親がどんな人間であろうが、どうでもよくなっていった」。そのうえ高校生の時に出会った「電気工学の勉強をする」「物静かで教養豊かな青年」であったはずのルートの父親は、ルートを身籠った「私の前から姿を消した」。結婚というものへの執着のように「結婚式場で働いて」キャリアを積む母親は、「立派な」「幻想」の父親を捏造し、結婚しないで子供を産む「私」を許さなかった。

それでも「私」は非婚シングルマザー⁽²⁾としてルートを育てる。自分の父親にも、息子の父親にも恵まれることのなかった「私」は、母のようにはなるまいという気概で、息子を育てていだろう。「他人から、父親のいない貧乏な家の子、と見られるのを何より嫌がり、「立派な父」を捏造した母。その母とは別の生き方である。「私」は決してルートに「立派な父」の「幻想」など話さなかつたろう。

しかしルートの父親の消息が新聞に載る。「若手の技術研究者に贈る賞を、彼が受賞した」のだ。「私」はそれを「ファーボールの呪い」の一つとして語っている。学業を諦め、援助者も理解者もなく、「家事のプロ」となってルートを十一年育ててきた「私」と、何も手放すことなく順調に「電気工学の勉強」を重ね、自己実現を果たす「彼」との落差。それを思えば、記事を見たときの「私」が、「呪い」と感じるほど、安からぬ心を抱いたことはやむを得ない。「私」は新聞を「くしゃくしゃに丸めてごみ箱へ捨てた」。しかし「思い直して」、記事を切り抜く。

私は自分に言い聞かせた。

「ルートの父親が賞をもらった。喜ばしいことだ。ただそれだけのことだ」

そして記事を折り畳み、ルートの臍の緒の箱に仕舞った。

既に「小さく折り畳ん」だ「写真」を入れていた「臍の緒の箱」に、さらに「記事」を「仕舞った」とき、「私」の中の「彼」も仕舞われたのだろう。新聞記事で「彼」の足取りを知っても、後追いなどしないと心に決め、4の階乗にふさわしい「実に潔い」生き方を意志する。現実的には、「ルートの父親」はもちろん責任を負うべきである。だがそれを望まず、いかにも「潔い」振る舞いとして「私」は語ってしまう。それでも「臍の緒の箱」に入れることで、ルートが自分の父親がだれであるかを知る機会は残したのだ。ただし「彼」は「ルートの父親」以上の人ではない。「私」の母は「私」に「父親」を知らせぬままに亡くなってしまったのだろう。だが「私」はルートに、それを知る手がかりをひとつ残した。「誰の手によって開かれることもなく生涯を終える数学書」のように、闇に葬られる可能性はある。だが、博士の書斎の「クッキーの缶」のように、開けられる日を待ち、思いがけず日の目を見る可能性は残る。ともかくもルートに生物学的な父親を与えたのである。

数学的感性や能力が遺伝的なものは不明だ。それでも、「ルートの父親」が賞を受けるような「若手の技術研究者」であることは、ルートが「数学の先生」になることと何がしかの因果関係を感じさせる。しかしながら、ここで重要なことは、博士との擬似的師弟関係や擬似的父子関係こそが、ルートを「数学の先生」に導いたように、「私」の語りが傾いていることである。ここに「私」の物語の方向性が顕著に表現されている。

ルートの「頭を撫で回しながら」「賢い心が詰まっていそうだ」と言い、「私」の靴のサイズから「実に潔い」と定義し、

自分たちは「神の計らいを受けた絆で結ばれ合った」「友愛教」だと博士は教えてくれたという。それらはすべてこの物語のなかで、自分たち親子を予言的に導いているかのようだ。だが事実は、「博士から教わった数えきれない事柄の中」から、「私」のシングルマザー物語構築のために必要なことばを取捨選択し、特別なことばとして、事後的に特記しているに過ぎないのだ。博士の予言か洞察力かのように語ることで、博士の類まれな能力として、「家政婦」の「私」は、雇い主を称揚している。

「私」の母が「私」の父を捏造して語ったように、「私」もまた博士を捏造している。だが、博士は「すらりと背が高く、英語が堪能で、オペラに造詣が深く」云々という陳腐な像ではなく、「美術館の彫刻のように」「手を差し伸べる気配」のない冷酷な父親でもない。偉大なる数学者をミキシングした博士像でありながら、ルートの成長に「抱擁」をもって関わった人として、物語の重要な登場人物としてしているのである。

おわりに——物語化の実践

非常に受け入れがたい**困難な現実**にぶつかつたとき、人間はほとんど無意識のうちに自分の心の形に合うようにその**現実**をいろいろ**変形**させ、どうかしてその現実を受け入れようとする。もうそこで一つの物語を作っているわけです。²⁶⁾

これは小川が語った「物語の役割」である。先に『アンネの日記』を例に「現実の物語化」としたことにつながっている。そして家政婦の「私」の語ったのは、父も知らず、母から見放され、赤ん坊の父親も姿を消したなかで出産し育児をしてきた非婚シングルマザーの、二十二年の過酷であろうその「困難な現実」を、誇るべき成長物語に「変形」させたものである。語りつつある「私」には、母が「立派な父」の「幻想」を語り続けた意味が分かっていただろう。その「幻想」は、

母が「困難な現実」を前に「その現実を受け入れよう」としたための「物語」であつたのだ。

それゆえに、「私」はこの語りが、編集を経て未来から語られた「物語」である（注23参照）ことを隠さなかつたのだ。「物語」であればこそ、「困難な現実」は困難なままに厳然としてあることが逆向きに示される。「私」のこの語りは、アンネ・フランクの日記に通じる「物語化」であり、「現実の物語化」の実践である。要するに、この小説は、「物語」とは何かを示した小説なのである。

そしてここには、ケアする者とケアされる者との相互性が描かれている。⁽²⁷⁾「手助けをするために雇われた、家政婦」として、「大丈夫です。心配はいりません」と博士に繰り返し返してきた「私」が、「大丈夫。安心していい。ルート記号は頑丈だ。あらゆる数字を保護してくれる」と励まされている。この外れなはずの数式の話を、〈鈍感な装い〉で「ルート記号」ではなく、「私」の息子のことだと変換して解釈する「私」は、雇い主の予言的能力を称揚しつつ、「困難な現実」を乗り越えたシングルマザーの物語を紡いでゆく。

また小川洋子の小説には、シングルマザーが多出するが、多くは『博士の愛した数式』と同じく、清貧ともいえる暮らしを、前向きに「実に潔く」生きる⁽²⁸⁾。そこには、宗教性ともからむ倫理観が横たわっているかもしれないが、その表象についても、問題性と併せて考える必要があるだろう。今後はそういう観点からも、小川作品を見渡してみたい。

(1) 引用は『博士の愛した数式』（新潮文庫、二〇〇五年）に拠る。なおルビは省略した。傍点は引用者。以下ほかの引用も同様。
(2) 監督…小泉堯史、出演…寺尾聰・深津絵里など。

(3) 前田壘「嘘をつく男そして／あるいは他者と（しての）忘却」（『ユリイカ』二〇〇四・二）。

(4) 山田夏樹「編集される記憶と「家族の物語」——小川洋子「博士の愛した数式」におけるサイボーク的表象——」（『昭和文学研究 第五十五』二〇〇七・九）。

- (5) 清水良典「文芸時評」〔群像〕二〇〇三・八。
- (6) 関谷由美子「小川洋子『博士の愛した数式』の語り手——〈離れ〉と〈暗闇〉——」〔社会文学 28号〕二〇〇八。
- (7) 初出『ホトトギス』(二九〇六・四)。引用は『漱石全集 第二卷』(岩波書店、一九九四)。以下同じ。
- (8) 小川洋子『物語の役割』(ちくまプリマー新書、二〇〇七)。
注4に同じ。
- (10) 現在でも「家政婦紹介所」の名称はあるが、一九六〇年には労働省(当時)が「事業内ホームヘルプ制度」を始めている。「家政婦」という呼称はなおも残存するものの、一九九〇年代としては古めかしいとしてもよいだろう。
- (11) 清水美知子『女中』イメージの家庭文化史(世界思想社、二〇〇四)。
- (12) 中島京子『小さいうち』(文藝春秋、二〇一〇)、引用は文春文庫版(二〇二二・二二)に拠る。
- (13) 松本清張『別冊黒い画集』(初出『週刊文春』一九六三・一〜一九六四・四)中の第二話。引用は『松本清張全集7別冊黒い画集・ミステリーの系譜』(文藝春秋、一九七二)に拠る。
- (14) 注4に同じ。
- (15) 『解説』(『博士の愛した数式』新潮文庫、二〇〇五)。なお、引用中の書名表題は『天才の栄光と挫折 数学者列伝』(新潮選書、二〇〇一)。
- (16) 千野帽子は「少年少女・家庭の医学 肺病で夭折した文學少女の靈に取り憑かれたしまった人たちのための小川洋子入門」(『ユリイカ』二〇〇四・二)で、小川の小説を「チャーミングな人工物」としている。本論ではそれを「家政婦」の語りとして検討した。
- (17) 注8『物語の役割』でも小川自身が語っている。
- (18) 注6に同じ。
- (19) ポール・ホフマン著・平石律子訳『放浪の天才数学者エルデシユ』(草思社、二〇〇〇)。原題“THE MAN WHO LOVED ONLY NUMBERS”。

- (20) 小川洋子・岡部恒治・菅原邦雄・宇野勝博著『博士がくれた贈り物』（東京図書、二〇〇六）でも小川自身が語っている。
- (21) 例えば千野帽子（注16に同じ）など。
- (22) 小川洋子『NHK100分de名著』（日本放送協会・NHK出版編集、NHK出版、二〇〇四）。なおこの件に関しては、中村三春「小川洋子と『アンネの日記』——「葉指の標本」「ホテル・アイリス」「猫を抱いて象と泳ぐ」など——」（北海道大学文学研究科紀要 一四九）二〇一六・七）を参照。
- (23) 語りの時間に関して言えば、一九九二年の九月十一日に十一歳の誕生日を迎えたルートが二十二歳になった秋ならば、それは二〇〇三年の秋であり、「私」の語りは早くともそれ以降になる。『博士の愛した数式』が二〇〇三年七月号に掲載されていることに拘泥すれば、この語りは未来から語られたことになる。ただし、あまりに長い回想であることや、語り手の「私」が物語の中で、物語現在を「現在」のこととして語っている場面が多いため、ある一点からの強固な回想の枠組みをもっているとは言い難い。たとえば、「博士は・佐々木注）ラジオで野球中継が聴けることさえつい最近になって分かった」や、「博士は昨日野球を観に行ったことも、私のことも、もう忘れてしまっていたのだ」などは、物語内の時間が現在のこととして語られている。しかしこの時間もまた「現実を物語化」していることを明示しているともいえるだろう。物語の時間については、橋本陽介『物語における時間と話法の比較詩学——日本語と中国語からのナラトロジー』（水声社、二〇一四）参照。
- (24) 赤石千衣子『ひとり親家庭』（岩波新書、二〇一四）によれば、同じ「ひとり親家庭」でも、父子家庭より母子家庭のほうが貧困率が高い。そして同じシングルマザーの中でも、死別、離婚、非婚によって差があり、婚姻歴のない非婚シングルマザーは、寡婦控除が適用されないことをはじめ、様々な不利益がある。
- (25) 清水論（注5に同じ）では「擬似家族空間」、飯田佑子「物語としての家族」（『現代思想』二〇〇四・九）では「人と人が深く関係しているということ」を記すためにだけ、参照される「ものとしての「家族の物語」などと論じられている。
- (26) 注8に同じ。
- (27) たとえば『ことり』もその系譜にある。拙論「小川洋子『ことり』——慎ましくひそやかな孤児たちの物語」（『生涯発達研究』6『二〇一四・二』）。
- (28) たとえば、『ミーナの行進』（二〇〇六）の主人公朋子の母など。